2016年8月21日中原キリスト教会メッセージ

聖書箇所：ナホム書1:2-8、3:18-19

**「ナホム：主の怒り」**

　本日はナホム書からです。これは旧約聖書十二小預言書の7番目の文書です。アッシリアの首都ニネベの滅亡を預言した文書です。アッシリアに散々痛めつけられたユダ族の救済についても預言されます。ナホムというのはヘブル語の動詞「na:ham」の変化形で「慰め」という意味です。ユダ族の救いの部分に慰めを見ているのでしょう。しかし、この救いの部分はユダ族に限定された表現ではありませんので、今日の我々をも含め、世界中の民を想定したものということも出来ます。ナホムと言う名の人物は新約聖書ルカ福音書3:25のイエス様の系譜のなかに出てきますが、異なる人物であることは明らかです。そう珍しい名前ではなかったことは事実でしょう。実はネヘミヤという名前も同じ「na:ham」から出た言葉であり「主は慰めたもう」と意味です。名前の最後にくる「ヤー」はヤハヴェを指しています。ネヘミヤはバビロニアからカナンの地に帰還したネヘミヤが有名です。ネヘミヤの方が後の人物ですが、ナホム、ネヘミヤは同一系列に属する名前です。

　ナホムは1:1でエルコシュ人と記されています。どこか定かではありません。伝統的理解はイラクの現在のモスルの北の町と言うものですが、あまり支持されていません。二つ目は北ガリラヤ、カペナウムと同定するものです。これも疑問視されています。第三はユダのベイト・イエブリンという町と推定するもので、これが一番説得的とされています。北王国は既に滅亡していましたので、ナホムがユダ王国の出身とするのは納得できます。時代を特定する言葉は1:1には記されていません。しかし、3:8にエジプトの町テーベがノ・アモンの名で出てきますが、この記述よりしてアッシリヤによるテーベ壊滅のBC663以降であろう、と考えられています。他方、ニネベはBC612にメディア、バビロニア連合軍に占領されていますので、ナホム書の預言はその前であるはずです。ニネベ滅亡が事後預言であるとする根拠はありません。従って、ナホムの預言した時期はまだアッシリアの脅威が大きかったユダ王マナセの頃とするのが妥当と思われます。BC7cの半ば、ということになります。イザヤとエレミヤの間の時期になります。即ち、アッシリヤによる北王国の滅亡とバビロニアよる南王国の滅亡の間の時期ということになります。

さて、ナホム書本文に入ります。1:2-8節は先ほど読んでいただいた2個所の一つです。神様の性質を示している箇所です。1:2には「主はねたみ、復讐する神。 主は復讐し、憤る方。 主はその仇に復讐する方。 敵に怒りを保つ方」とあります。「ねたむ神」とはどういうことでしょう。英語ではジェラシーです。うらやむ、と言う意味であり、神様は何をうらやんでいるのか、神様の性質としておかしいのではないか、と感じられる、と思います。このヘブル語の言葉は「qano:」という言葉ですが、ヨシュア記24:19にも「ねたむ神」として出てきます。新共同訳聖書では両箇所とも「熱情の神」と訳されています。この「qano:」という形容詞の動詞は「qa:na:」であり、「大変熱心である」と言う意味で使用されています。第一列王記19:10には「私は万軍の神、主に、熱心に仕えました」とあり、この「熱心」が「qa:na:」です。人間の間でのことでこの言葉が使われる場合は「ねたむ」でも良いのですが神様の性質を言う時は「熱情の」の訳の方が適当だと思われます。しかし伝統的に「ねたむ神」と言われてきたので、この表現を踏襲している場合が多いでしょう。“熱情をもって愛する結果、そむくことを許さず、人間の目から見るとねたむように見える”という意味という事だと思います。要するに神様は熱情をもってこの世を、人間を愛してくださっている、ということです。この節をアメリカの神学者アクティマイヤーは次のように訳しています。「熱情の神、報復者は主/報復者は主であり、怒りの所有者/報復者はその敵に対抗する主/怒りの保持者はその仇に対抗する方」。これはヘブル語における語順を意識しながら、神・主、報復、怒り、敵・仇、対抗という言葉が韻を踏むように繰り返し使用されていることを示そう、とした訳です。新改訳の言葉を使うと、この節で「ねたむ神」、「復讐する神」、「憤る神」、「怒る神」の4つが示されています。この4つの底流には「熱情をもって選ばれた民イスラエルを愛する神」があります。ここに示された神様の性質は、イスラエルの主なる神は鎮座まします神ではなく、この世の出来事に介入してこられる神である、ということです。絶対神として永遠のかなたにおられる方ではないのです。この我々のどろどろした罪の現実のなかで狂うように人を愛し、働かれる神である、ということです。これは新約聖書の「神は愛なり」の言葉に綿々と流れています。

3節では「主は怒るのにおそく、力強い。 主は決して罰せずにおくことはしない方。 主の道はつむじ風とあらしの中にある。 雲はその足でかき立てられる砂ほこり」と言われています。重要なのは「怒るのにおそい」ということと「決して罰せずにはおかない」という点です。怒る、というのは愛の裏返し表現ですが、怒りを表すのは最後の最後である、と言われています。神様の怒りは人間の耐えられる範囲を超えたものですから、ぎりぎりまで神様は忍耐される、ということです。考えてみるといかに多くの、神様の怒りを招いてもしょうがない事を人間は、私たちはしていることでしょうか。おそらく、自分では気づいていないことも多くあろうかと思いますが、少なくとも気づいたら、悔い改め、そしてその実としての証を示さねばなりません。新約聖書でもヤコブ書1:19で「怒るにはおそいようにしなさい」と勧められています。しかし、他方で、神様は「決して罰せずにはおかない」方である、とも言われています。仏教の仏のように無限の慈悲ですべての罪は許される、というのとは異なるのです。いかなる罪もそのものとして許されず罰する、と言うのです。怒りは遅くするが必ず、いかなる罪にも罰がくだされる、というのです。イスラエルの民はこの神の罰から救いだす方を待ち望んできました。私たちキリスト者は我らが主イエスが、この罪を一身に負ってくださり私たちに赦しが与えられたと言う証言者です。神の子の死という大変な犠牲を払って神の怒りを回避することができたのです。ここで重要なことは、私たちの敵に対する怒りをどうすべきか、ということです。この節で言われているのは、神様は、怒りを表すのを忍耐しているが必ず罰を与えられる、ということです。もちろん、ナホム書ではアッシリアの罪が背後にあるのですが、今の我々の状況に当てはめてみてよいと思います。“神様が必ず罰するので自分で報復する必要はない”ということを言っています。実際はユダ王国はたびたびアッシリアへの攻撃を企て、逆に散々な目にあわされていました。アッシリアとユダ王国の歴史の中に示されています。イザヤは一切軍事的な同盟を組むことに反対しました。これは私たちの現在についても新しきイスラエルはどう行動すべきか、についての示唆を与えている、と思います。私個人のレベルにおいても同様です。ローマ書12:19で「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる」とあります。この言葉自身は申命記32:35からの言葉のようですがナホム書もこれに通じています。私などは、「あたまにきた」と言って、やつけてやりたい人間が多数います。特に政治家には頭にくる人間が多い。その都度、口で「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる」と繰り返します。「敵を愛する」ところまでは全く遠いのですが、せめて報復は主に委ねる信仰は持ちたいものです。

　9節以降1章の終わりまではアッシリア・ニネベに対する滅びの予告や、その過程の下でのユダ族の救いについて語られています。心に留めておきたい節を取り上げてみます。13節です。「今、わたしは彼のくびきを あなたからはずして打ち砕き、 あなたをなわめから解き放す」とあります。アッシリアとユダとの関係にあてはめると、アッシリアの支配からユダを解放する、と主なる神がおっしゃられている言葉と理解できます。わたしが注目したいのは7節の表現と合わせ見るとどうなるか、ということです。“主はいつくしみ深く、主に身を避ける者達のくびきをはずし、なわめから解き放す”と繋げて読むことができると言う点です。思い出す御言葉があります。有名なマタイ11:28-30をお読みします。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。/わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。/わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」とあります。本当にこの御言葉はいつ読んでもこころに安らぎを覚えます。この言葉は私を教会に導いた言葉ですので忘れられません。主なる神、我らが主イエス・キリストは軛をはずし、なわめから解き放ち、あらためて軽い軛を負ってついてきなさい、とおっしゃっています。ナホム1:7、ナホム1:13は新約の時代に、主イエスの言葉をもって我々に呼びかけられました。

　15節に「見よ。良い知らせを伝える者、 平和を告げ知らせる者の足が山々の上にある」と言われています。この箇所はローマ書10:15で福音を述べ伝える人が必要である、ということの引用で出てきます。このナホム書1:15の「良い知らせを伝える者」はヘブル語で「mebase:r」即ち「ニュースを運んでくる人」ということです。このギリシャ語訳は「yu:an-gelizomenu:」でありマルコ福音書1:15の「時が満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」の「福音・yuan-gerizo:」と同じ語です。従って福音を伝えるとは「良い知らせを伝えること」なのです。マルコ福音書の「福音」は新約聖書のヘブル語訳では「besora:」と訳され、ナホム書の「良い知らせを伝える者」（mebase:r）の変化形です。この「良い知らせを伝える者」という表現はイザヤ書にも三度出てきます。40:9をお読みします。「シオンに良い知らせを伝える者よ。 高い山に登れ。 エルサレムに良い知らせを伝える者よ。 力の限り声をあげよ。 声をあげよ。恐れるな。 ユダの町々に言え。 「見よ。あなたがたの神を」」。ここは所謂第二イザヤの最初の章であり、イスラエルの救いの預言が始まるところです。第二イザヤはナホムの後ですから、イザヤ書のこの箇所はナホム書から採られたもの、と推測できます。私たちクリスチャンにとってみてこの「良い知らせを伝える者」は主イエス・キリストなのですが、私たちは主に従うものとして、この良い知らせを告げる役を仰せつかっています。BC7cのナホム書の「良い知らせを伝える者」が新約聖書の「福音を述べ伝える者」に繋がっているのです。次に「平和を告げ知らせる者」というのが出てきます。平和はユダヤ人のあいさつの言葉「shalo:m」です。ギリシャ語では「eire:ne:」です。もちろんイスラエル信仰において「平和」はまず「神との平和」であり、その神との平和が確立しているところでは神の創造物、人間と人間、人間と自然、人間と動植物との平和が齎される、という事です。そのことは当然のことながら戦争の無い世界を意味します。キリスト者はその神の国の証人です。

　2章から3:17まではニネベ滅亡の預言です。若干の箇所についてみてみます。2:5で「貴人たちは呼び出され、 途上でつまずき倒れる。 彼らはその城壁へ急ぎ、防柵を設ける」と言われていますが、ここで言う「貴人」の解釈はいろいろあります。口語訳は「将士」です。「将軍」の「将」と戦士の「士」です。新共同訳は「将軍」、フランシスコ会訳は「選り抜きの者」です。英訳も様々です。ヘブル語は「力ある者、栄光ある者」という意味の「adi:r」でありギリシャ語訳は「偉大なる者」の意味の「megiostan」です。英語で王さまを呼ぶとき「マジェスティー」といいますが、同義と思われます。従って、アッシリアの指導者たちが敗北して連れて行かれる様子を預言している、と言えます。ニネベが陥落した時、アッシリアの高官たちは酒に酔っていた、というエピソードがあるので「つまずき倒れ」たのはそのためだ、という話もありますがそうかもしれません。3:1-3をお読みします。「ああ。流血の町。 虚偽に満ち、略奪を事とし、 強奪をやめない。

2 むちの音。車輪の響き。 駆ける馬。飛び走る戦車。3 突進する騎兵。 剣のきらめき。槍のひらめき。 おびただしい戦死者。山なすしかばね。 数えきれない死体。 死体に人はつまずく」とあります。戦争、内乱の現実はこのようなものなのでしょう。ゆっくり読むとたまらなくなります。このナホム書の文脈では、ニネベ滅亡の情景ということになりますが、このことは世界中で、昔から繰り返されてきました。ナホムの心には滅亡近いエルサレムがそのように映っていたかもしれません。ナホム書はアッシリア・ニネベの滅亡を告げ、ユダの救いが来る、との「良き知らせ」を告げることに意味がある、と言われていますが、ユダの救いに関する部分は少しであり、大部分はアッシリア・ニネベの滅びの預言です。これらは、アッシリア・ニネベに範をとって述べているが実は預言者の意図はユダ王国の命運について警告しているのだ、と解することもできます。すると、ユダの救いは、ずっと将来のイスラエル復興の希望について語ったものということも出来ます。本当はアッシリア・ニネベに関する範囲を超えた、人類の罪と救いについての預言なのかもしれません。

　最後に3:18-19においてアッシリアに対する滅亡の告知をもってナホム書はおわります。もう一度18-19をお読みします。「18 アッシリヤの王よ。 あなたの牧者たちは眠り、 あなたの貴人たちは寝込んでいる。 あなたの民は山々の上に散らされ、 だれも集める者はいない。19 あなたの傷は、いやされない。 あなたの打ち傷は、いやしがたい。 あなたのうわさを聞く者はみな、 あなたに向かって手をたたく。 だれもかれも、 あなたに絶えずいじめられていたからだ」とあります。「牧者たちは眠り、貴人は寝込んでいる」と言われています。牧者は宗教的指導者、貴人は軍事的・政治的指導者と理解できましょうか。眠る、というのは死んでいることの隠語です。要するに、アッシリア王の部下は殺され、民を集める者はもういない、と言っています。この「集める者」という言葉はイザヤ書13:14にも出てきます。「追い立てられたかもしかのように、 集める者のいない羊の群れのようになって、 彼らはおのおの自分の民に向かい、 おのおの自分の国に逃げ去る」と言われています。このイザヤ書の「集める者」がナホム書に受け継がれ、これが更にエレミヤ書に引き継がれます。9:22を例示します。「語れ。――主の御告げはこうだ――人間のしかばねは、畑の肥やしのように、刈り入れ人のあとの、集める者もない束のように、横たわる」とあり、「人間のしかばね」など、先程見たナホム書3:3の表現に類似しています。19節、最後の節は残酷です。アッシリアに散々いじめられていた民はアッシリア・ニネベの滅亡を、手を叩いて喜ぶ、というのです。祝宴の場が備えられる、と理解しても良いかもしれません。気持ちはよく解ります。ナホムもそのような気持ちを隠さず表した、と考えるべきでしょう。しかし、我々の信仰にとって重要なのは、主なる神が祝宴の時まで導いて下さるのであって、自らの力でこれを為す、ということではない、と言う点です。先ほどの「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる」のです。また昔は戦争も喧嘩の延長で、相手がダウンすると喜ぶのが許されるような場面もあったかもしれません。豪傑の一騎打ちなんて言うのはこの範囲で見ることも出来たでしょう。しかし、近代以降、戦争は惨憺たる情景以外は残らず、喝采などやる場面もありません。本当に戦争は罪の塊になってしまいました。牧歌的なところの残る喧嘩や一騎打ちなどではないのです。

それにしても今までお読みした、陥落後のニネベの情景はなまなましいものです。私の父は写真が好きで、中国南部に戦争で行った時も写真機を持ちあるっていたという人間です。私は小学校高学年の頃だったと思いますが、父の撮った古い写真のなかから明らかに戦争で死者が数体転がっている写真を発見し、驚愕したことがあります。小さな写真でしたが、死体であることはすぐわかりました。一人兵隊が立っていた、と思います。父はその後、自分史を書き戦時中の事も書いていましたが、この写真は入っていませんでした。殺伐とした、荒涼たる雰囲気の小さな白黒の写真でした。今のイスラエルとその周辺、イラク、アフガニスタン等の状況はナホム書3:3の言う「やまなすしかばね」があちこちに見られる状況です。いたたまれなくなります。国連難民機構に若干の寄付をしている関係でしょっちゅう追加寄付の依頼や、多くの難民の状況に関するニュースが送られてきます。こんなにどんどん難民が増えて居てはいくら難民機構ががんばってもとても追いつきません。このようなところで日本ができることは何なのかよく考えなければなりません。少なくとも、自衛隊を送ってアメリカと一緒に戦争をすることなどではないことは明らかです。油を注いでいるみたいなものです。そもそも、あちらの国の人間には“そもそもの争いの原因を作ったイギリス、アメリカは責任をとれ”といううらみ、つらみが背後の心情であります。そしてそれは事実である、と言わざるを得ません。個人的には我々日本がしゃしゃり出る場面ではない、出しゃばるとむしろ害悪である、と思いますが、中近東についてはただ、ただ神様の導きを祈り求めるのみです。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、ナホム書のなかから神様の御性質について学びました。熱情をもって我々を愛して下さる神様は、一切の罪を赦さず、罰を与える方だと言われています。主イエスの御業により我々が罪赦された者とされたことを感謝申し上げます。人間の罪の塊とも言うべき戦争が世界のあちこちで在ります。どうか、どうか、御力により平和を齎して下さい。我らの救い主イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン）